



航空思想普及のための航空機同乗(陸軍整備学校 昭和19年)

■飛行場の建設

現在の横田基地に沿っている国道一六号は、かつては日光街道とよばれ、現在の位置から約六〇メートル東寄りの基地内を通っていた。当時は道幅もせまく、昼間もうす暗いほど木が繁っていた。

一九三九年(昭和十四)七月三日、福生村熊川村組合役場は飛行場建設用地の関係地主に対し、協議のために出頭するようにと通知を發した。翌四日、福生尋常高等小学校に印鑑をもって出席した地主は、村内四三名、村外四三名であった。この席で軍部の要求どおり土地売渡しが承諾され、七月七日から軍部は測量を開始し、雑木の伐採が始められた。飛行場建設は大林組と浅沼組が請け負い、六〇万坪(二〇〇ヘクタール)の飛行場は、多くの人たちの手によって翌々年に完成したが、完成(昭和十六年一月)を待たずに、昭和十五年四月一日、陸軍飛行実験部が移転してきた。

陸軍飛行実験部は、陸軍航空技術研究所から独立したもので、実用テストと審査を行う部門であった。飛行場では長さ二二〇メートル、幅五〇メートルの滑走路を使って飛行テストが進められ、移駐四か月半後



旧日本陸軍兵舎 現在、米軍兵舎。



旧日本陸軍格納庫 現在、米軍格納庫。

編を実施した。航空技術研究所は研究だけを行うことになり、これに代わって航空関係機器材のいっさいのテストと審査を行うようになったのが、陸軍航空審査部である。これは飛行実験部の業務を大幅に拡大して新しい組織としたのであった。

改編後の審査部飛行実験部の任務は、試作および新採用の飛行機、航空兵器、装備品の性能テストと実用テストであった。また外国製機の性能調査も任務の一つであった。輸入機ではドイツのメッサーシュミット、米英のダグラスDC，セバスキーなどである。捕獲機はカーチスP-40、バッファロー、ホーカー・ハリケーンなどであった。

航空審査部は陸軍の組織の一つではあったが、軍隊ではなく官庁であったから、一般の民間人も

の八月十五日には開場式が行われて、九七式戦闘機を飛ばすアトラクションも行われた。この東洋一を誇る飛行場は、一般には多摩飛行場とよばれ、審査部、氣象部、整備学校が使用していた。

■陸軍航空審査部

ミッドウェイ海戦に敗れ、米軍の本格的反攻が始まると、一九四二年（昭和十七）十月十五日付けで、陸軍は地上、航空双方の兵器行政の改



旧日本陸軍管制塔 現在、米軍気象隊が使用。



旧日本陸軍航空審査部 現在、米軍第374作戦群第36空輸中隊本部として使用。

多数働いていた。職員は、軍人軍属合わせて約三五〇〇人を数えた。航空審査部のなかでは、もつとも軍隊に近い組織である飛行実験部だけが男所帯で、飛行機部、発動機部、材料部などに属する課には、事務や製図を担当する女性も多かった。一九四五年（昭和二十）八月十五日の終戦とともに、審査業務はいっさい停止となり終戦処理に入った。八月二十九日には航空本部の指令により、審査部はこの日をもって解散となった。

甲府岩

一九四四年（昭和十九）四月十日、昭和天皇が最新の軍用機を視察するためと軍の士気を高めるため、陸軍航空審査部を訪れた。甲府岩はこの訪問を記念するものである。

